読書推進運動

No.677

★クラウドファンディングご協力のお願い（2頁）
★「読書週間」ポスターイラスト募集（8頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

「こどもの読書週間」によせて

いわさきちひろ没後50年を考える

ちひろ美術館常任顧問　横浜美術大学客員教授
絵本評論家・作家
松本（まつもと）　猛（たけし）

母であるいわさきちひろが世を去ったのはベトナム戦争が終わる1年前の1974年のことでした。その前年、ちひろの最後の絵本になった『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）が出版されます。同じ年に絵本『猫は生きている』（早乙女勝元・文／田島征三・絵　理論社）も出版されます。どちらもベトナム戦争のさなか、米軍の無差別爆撃などによって、なんの罪もない子どもたちが犠牲になることに対して、戦争の悲惨さや悲しさを描き、平和の大切さを語らねば、という強い意思をもって制作された絵本でした。今なお、ウクライナやガザでたくさんの子どもたちが亡くなっています。残念なことに、この50年の間、紛争は世界各地で絶え間なく起こり、子どもたちは犠牲になり続けています。

絵本が、戦争をはじめ、社会的テーマを本格的に取り上げるようになった嚆矢が、実はこの2冊の絵本でした。絵本は、子どもたちの成長と喜びのためのもの、というかつての考えから、現在では平和をテーマにした絵本をはじめ、人権・差別、自然・地球環境、多文化共生、老いと死、原発など、以前は考えられなかった社会的テーマの絵本が続々と出版されています。「絵本でも社会的テーマを語らねばならない」「絵本ならではの表現ができる」と考えた作家や編集者の努力もあり、1970年代、1980年代から絵本の多様化が始まります。絵本も少しずつではありますが、ようやく映画やマンガと同じように、ひとつの表現ジャンルとして認識されつつあります。

50年前、私はちひろの遺作展をどこかの美術館で開催したいと奔走したのですが、当時の美術界では絵本画家の作品は芸術作品とは認識されておらず、すべての美術館で門前払いにあいました。いわさきちひろ絵本美術館（現・ちひろ美術館）の設立を決意した理由のひとつはそこにありました。今では30近い絵本専門美術館が生まれ、多くの公立美術館でも絵本原画展が当たり前のように開催されるようになりました。絵本はテーマの拡大とともに、美術表現のジャンルとしても社会的に認知されるようになってきました。

いわさきちひろという人は、子どもの幸せと平和というテーマで作品を作り続けると同時に、絵本は芸術だと考えて絵本表現を追求した作家でした。その意志は多くの絵本関係者に引き継がれています。

ちひろ美術館（chihiro.jp）は没後50年の今年、ちひろの願いと仕事を現代に生かすために、「あれ　これ　いのち」（東京3月1日～6月16日、安曇野9月7日～12月1日）、「あ・そ・ぼ」（安曇野3月1日～6月2日、東京6月22日～10月6日）、「みんな　なかまよ」（安曇野6月8日～9月1日、東京10月12日～2025年1月31日）という3つの特別展を企画しました。インタラクティブ・アートで注目されているplaplaxをディレクターに迎え、保全生態学、発達心理学、インクルーシブデザインの専門家の協力を得て、これまでにない新しい展覧会の創造に取り組んでいます。

●いわさきちひろ没後50年記念 特設サイト https://chihiro.jp/2024kodomo/